

恋描かず 独歩のよう



若山牧水と土岐善麿にとつての武蔵野は、青春の地であり歌人としての出発点でした。無名だった武蔵野時代に競作した「むさし野」短歌100首は、牧水全集でも土岐の書誌や全歌集でも把握されていません。拙編著「武蔵野文化を学ぶ人のために」やむさし野文学館(ホームページ「<https://www.musashi-no-bungakukan.jp/>」)が明らかとするまでは、その

若山牧水と土岐善麿 ②



文芸評論家の秋山駿さんの蔵書を中心に展示するむさし野文学館

存在が注目されることはありませんでした。

例えば1907年(明治40年)3月3日に読売新聞に発表された牧水の「町はづれ春

の夜をゆく汽車の音のいや遠ざかる灯の白き穂よ」(全集未収録)は、国木田独歩「武蔵野」へのオマージュと言え重要な作品です。独歩の「武蔵野」のクライマックスでは、武蔵野の眼目は町外れにあり「町外れの光景は何となく人をして社会というものの縮図でも見るような思いをなさしむる」からこそ「詩趣」があるのだとしていました。結びは「それでも十二時のどんががすかに聞こえて、どことなく都の空のあなたで汽笛の響がする」でした。遠くに聞こえる汽車の音(響)は、町外れ(武蔵野)を表象し、近代文明とのほどよい距離感を示しています。「遠ざかる灯の白き穂よ」とあるのは、汽車の灯に古代武蔵野に広がっていた薄の穂が幻視されていた

るからでしょう。

「むさし野」短歌には恋の歌が見当たりませんが、武蔵野時代の牧水には恋の相手がいきました。悩ましい恋愛の要素を捨象して武蔵野を描いている点も独歩「武蔵野」と重なります。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

おすすめの1冊

「NAKIWARAI」

94歳まで武蔵野大の前身である武蔵野女子大の教壇に立った土岐(1885~1980年)は、大学を卒業後、読売新聞に就職します。「NAKIWARAI」は、社会部の記者時代に出版した第1歌集です。一首一首をローマ字つづりの横書きにして3行に分けて表現するそのスタイル自体が斬新でした。



(むさし野文学館所蔵)